

『桜が咲く頃 君たちは』

香澄ユミ

9, 956字

あらすじ:

高校2年生の彩香は、親友のカリンとブンちゃんと楽しく毎日を過ごしていた。ある日、自分たちがまもなく「受験」という人生の節目を迎えることを意識し、未来というものについて考え始める。ある女子高生の、何気ない日常の物語。

(107字)

★P.2～本編

授業終了のチャイムまであと5分。カツカツと、チョークと黒板のぶつかる音が響く。

この授業が終われば待ちに待った昼休みである。随分と前から私のお腹は悲鳴をあげており、あと少しの時間でさえもどかしい。先生は生徒に背中を向け一心不乱に板書をしているし、隣の席の濱田くんはすでに教科書もペンケースも片付けたようで、財布を手に足踏みをしている。どうやら今日は食堂で食べるらしい。1日50食限定のB定食をゲットするには、授業終了のチャイムと共に食堂に走るのが賢明だ。

今か今かと掛け時計に意識を集中させていたその時、唐突にその音は鳴った。

「ピロン」

途端に教室の空気が凍る。スマホの着信を告げる音に、板書をしていた先生の手も動きを止めた。うちの学校では授業中の携帯電話使用は禁止、マナーモードにしておくのが鉄則である。やばい……。上からゆっくり覗き込むと、私のブレザーのポケットの中で、マナーモードにしそびれたスマホが緑の光を点滅させているのが見えた。汗がじんわりと出てくるのが分かる。先生がゆっくりと振り返ろうとした瞬間、

「先生！！そこ漢字間違っていない？」

大きな声に振り返ると、カリンが手を挙げている。続けてブンちゃんが

「つちへん、じゃなくて、ござとへんです」

と付け足した。

「……ああ、そうだな。悪い」

先生が向き直り板書を再開すると教室の空気が一気に緩むのが分かる。途端に待ちわびたチャイムが鳴り響いた。

「ふあ～終わった～」 「腹減った～」 と口々に漏れる学生の声に混じって、最後までノート取れよ。一番重要なところだからな。と先生が言っているが、ほどほどに聞き流して、起立・礼で授業が終わった。

「カリン様ナイスだわー…！ほんっつとに助かった！！」

私の言葉に、カリンは綺麗に形作られた卵焼きを口に運びながら、鼻の穴を広げ頷く。

「そうだろうそうだろう！もっと敬いたまえ！」

「最近多くない？マナーモードいちいち解除しなければいいじゃない」

そう言うのはブンちゃんである。

「目覚ましに使った後、設定し忘れちゃうんだよね……。ブンちゃんもありがとう！ほん

と冷汗出ちゃった」

ブンちゃんは眼鏡をクイっと上げて「ほんと彩香は変わらないな」と笑い、お弁当箱のウィナーに狙いを定めた。

私たちは、それぞれの机を向かい合わせにくっつけ、ランチタイムに突入していた。2年3組の教室には他にも机の小島がいくつか出来ていて、仲の良い友達同士が思い思いの昼休みを過ごしている。

私たち3人は高校2年になって仲良くなったグループだ。出席番号が近い為、座席が近かったことがきっかけである。

カリンこと宮城^{みやぎゆか}優花は、新学年の初日に話しかけて来た。噂は聞くが話したことがない子という認識だったので、一定の距離を保っていた私に対し「初めまして。私このクラスあんまり知ってる子なくてさー、仲良くしよ！」と満面の笑みで手を差し出してきた。そんな彼女を私は一目で気に入った。見た目はフランス人形みたいにふわふわ可愛いのに、予想外に明け透けな性格で、男女問わず人気があると思う。最初はユカリンと呼んでいたのだが、いつの間にか“ユ”が取れてカリンになった。

ブンちゃんこと松居^{まついふみの}文乃と私は小学校からの幼馴染で、家も2ブロック先という近さだ。黒髪ロングの眼鏡が印象的、生徒会の書記も務める見た目通り秀才でしっかり者のブンちゃんと、おっとりマイペースと言われがちな私は性格の違いからかすぐに仲良くなり、ずっと前から家族ぐるみの付き合いだ。互いの家族からは「2人一緒にいれば補い合えるから安心よね」とよく言われる。私的には一方的にお世話になっているだけの気がするんだけど……。

私と握手を交わしたカリンが、ブンちゃんと打ち解けるのはあつという間だった。

先ほどは私のスマホが鳴ったのに気付いた2人が、意図的に先生の気を逸らしてくれたのだ。実は教室ではよくある光景で、何人もの生徒が、主にカリン様に助けられていた。仮に誰のスマホが鳴ったか特定されるとその場でスマホを没収され、内申点を下げられるのだ。まもなく3年生を迎える身としては、何としても阻止したいところだ。日本史の授業中だったというのもラッキーだったのかもしれない。担当の吉田先生は、年配なので耳も遠く俊敏さに欠ける。

「誰からの連絡だった？」

カリンが聞いてきたので、ポケットを探って確認する。

「えーっとね……、うわ、お母さんだ」

「あーやママかあ！授業中ラインしてこないようお願いしときなよ！」

カリンは私のことを“あーや”と呼ぶ。

「彩香ママなんだって？」

ブンちゃんの問いかけに、私は苦笑いしながら画面を見せる。

「今日、スーパーの特売日だったから得した……白菜が安いって」

「「くだらねー！！」」

ブンちゃんとカリンがゲラゲラ笑う。私もつられて笑ってしまう。3人一緒だとちっぽけな出来事だってすごく面白くなる。私たちはまるで、生まれた時からずっと友だちみたいに気が合って、いわゆる青春を、こんな調子で力いっぱい楽しんでいた。

ひとしきり笑うと「彩香の家、今日鍋かな？」とブンちゃんが言った。

「あーいいなあ！最近本当に寒いし、冬休みまであと2日だもんねー！」

カリンが窓の外に目をやりながら机の上で伸びをした。教室は中庭に面しており、暖房によって曇った窓からは冷たい風に揺れる木々が見えた。中庭にはいくつかのベンチや小さな池があり、都会のオアシスをイメージしていると入学のしおりに書いてあった気がする。夏場であればベンチに座り、お喋りに夢中になる女子生徒やありあまった元気を発散する為に走り回る男子生徒がいるのだが、木の葉も散って裸の木が並ぶ冬の中庭に、ぬくぬくとした教室を捨てて出ようなんて人は滅多にいない。上履きのまま通れるので、移動教室の際に通り返ける生徒がいるくらいだろう。

ふとマフラーに顔を埋め、黒髪をなびかせ歩いていく生徒が視界に入って来た。その風貌に目が止まる。

「あれ。琴ちゃんじゃない？」

私が指を差す方に、ブンちゃんが目を凝らす。

「あ、ほんとだ。お姉ちゃんだ」

「今日はいつもの人と一緒じゃないんだね」

「ああ、篠宮先輩ね！目立つよね、美男美女カップルだから！」

カリンの言葉にブンちゃんの動きが止まったので、私たちはまじまじと見つめる。するとブンちゃんは肩をすくめ、観念したように話し始めた。

「……なんかね、ケンカしたんだって」

私とカリンが反応する前に教室がざわめき出した。

ざわめく方に意識を向けると、担任の杉山絵都子が名簿を抱え教室に入って来る所

だった。ざわめく理由は明確だ。うちの担任はホームルーム開始時間に遅れてやってきて、生徒にイジられるのが常なのだから。

「絵都子先生早くない！？」「珍しいー！」等と口々に言う生徒の中、カリンの声が入り込んで通る。

「えっちゃん！昼休み、あと5分あるって！焦りすぎ！」

絵都子先生はカリンに目を止めると

「5分前行動は大人の基本でしょ？」

と笑いながらこちらに近づいて来た。

「よく言うよ！いつも遅れて来てるのは誰でしたっけ？」

上から目線の発言に、クラスのあちこちからクスクスと笑う声が聞こえる。

杉山絵都子は陸上部の顧問をしており、日焼けした肌にジャージがトレードマークの先生だ。たまに厳しい面も見せるが、生徒の気持ちを汲んでくれる先生という印象で、いつも一つに結んだ髪を元気よく揺らしている。

「まあまあ。あと5分はゆっくりしといてよ」

絵都子先生はクラスをぐるりと見まわし答えると、カリンの肩に手を置き声を潜めて言った。

「日本史の授業中、スマホが鳴ったらしいね」

ドキッと心臓が跳ねる。凶らずもあとの2人と目が合う。どちらの目も“まずい”と言っているのが分かる。

「……なんのことですか？」

しらを切ろうと決め向き直ったカリンに、絵都子は大袈裟に手を振りながら

「何も今更没収しようって訳じゃないのよ」

そしてわざと困った顔を作って見せた。

「今日放課後作業があるんだけど、一人じゃ大変だから手伝ってくれる子を探してたの。ちょうど3人が手伝いたいって顔してるなと思って」

その表情が変に演技じみてて可笑しくなってしまう。私とブンちゃんは再び目を見合わせ“やられたね”と無言で言い合う。

「手伝いたいなんて思ってないけど！」

「またまたあ！優しい子たちで良かったわー！」

カリンの鋭い言葉が見事にスルーされたところでホームルーム開始のチャイムが鳴った。「放課後、教室に集合ね」と言いながら、絵都子先生は教壇に踵を返す。カリンが「吉田め〜……」と恨めしそうに呟くのが聞こえた。机を元の位置に戻していると、ドタド

夕と廊下をかけて来る音がして校庭でサッカーをしていた男子生徒たちが教室に飛び込んで来る。

すぐにホームルームは始まり、明日は終業式なので正装で来ること・机の中に置いてある教科書等は明日全て持って帰ること(ここでクラス中からええーっという抗議の聲が上がったが、先生の「教科書なしで冬休みどうやって勉強するの?」の言葉に口を閉じた。)・清掃後、机と椅子を全て廊下に出すこと等、学期末の連絡が続いた。最後に絵都子先生は「次の授業遅れないように」と言うので教室を出ていった。

この日最後の授業は体育だった。冬の体育館は物凄く冷えるので、ロッカールームはヒャーヒャー言う女子生徒の声で非常に賑やかである。

「えっちゃん、規則にがんじがらめじゃないとこはいいんだけどさー、やられた！って思うこと多いよねー」

ジャージに着替えたカリンが、バレーボールを右手で遊ばせながら溜息をついた。「ごめんね、私のせいで」と言うので「いいよ。どうせ部活もないから暇だったし」と、ブンちゃんが髪の毛を束ねながら優しい声で言う。

体育館はネットで仕切られ、手前側では女子がバレーを、奥半分では男子がバスケットをしている。体育は男女別の2クラス合同で行う為、1クラスずつしか試合が出来ず、今は待機時間である。私たちは体育館の隅の方に腰を下ろし、ストレッチと言う名目でぼんやりと試合を眺めていた。

「ねえねえ、ブンちゃん」

急に声をかけられ振り返ると、隣のクラスの沙梨ちゃんとまゆゆが腰を下ろす所だった。沙梨ちゃんは学年一セクシーだと有名な子、まゆゆはそんな沙梨ちゃんに、いつもくっ付いている。

「篠宮先輩と琴乃先輩、別れちゃったの?」

沙梨ちゃんは茶色い髪をかきあげ、ブンちゃんに擦り寄るようにしながら聞いてきた。

「別れてないよ」

「えーそうなんだー。じゃあなんで一緒にいないの? 私、篠宮先輩好きなんだよね」

「……さあ。たまたまじゃない?」

ブンちゃんのツレない態度に沙梨ちゃんは「ふーん」と言って、不貞腐れたように長い足を伸ばした。

「人の不幸は蜜の味とは言いますが、この機会に奪ってやろう的な!？」

カリンが茶化すと沙梨ちゃんはあからさまにムツとして

「違うわよ。琴乃先輩が相手だと歯が立たないから自然消滅するのを待ってるだけじゃない！」

「おー、怖！そんなカッコしないで！」

一触即発な空気が漂い始めたのとほぼ同時にまゆゆが囁いた。

「沙梨ちゃん、濱田くんの試合始まるよ」

「え……やばい、早く行かなきゃ！」

そう言うときのようなスピードでバスケットコートの方へ行ってしまった。

「……肉食女子ってああいう子の事言うのかな」

「ああ、そうかも！」

「……でもモテるの分かるかもなあ……」

私の眩きに、カリンとブンちゃんはひよっとこみたいな顔をしている。私は沙梨ちゃんたちが走って行くのを目で追いながら、ただぼんやりと濱田くんはB定食を食べられたのだろうかと考えていた。

「そういえばブンのお姉ちゃんの話、途中だったね！」

カリンの声にブンちゃんは、そうだったね、と座り直すと

「さっきは知らないふりしたけど、言った通りケンカしちゃったんだよ。しかも理由が“進路の違い”で」

「ああ、琴ちゃん、来年大学生だもんね」

「そっか！あーやとブンが幼馴染ってことは、お姉ちゃんの方も知ってるのか」

「そう。小さい頃はよく遊んでもらったなあ。1個上なだけなのに、すごく年上の人みたいな感じで、落ち着いてるの」

私は幼い頃、自分にお姉ちゃんがいたらこんな感じかなと琴ちゃんのことを眩しく見ているのを思い出す。ブンちゃんは頷いて

「お姉ちゃんも篠宮さんも進学希望だったんだけど、お姉ちゃんは推薦で結構早くに大学が決まって。でも篠宮さんは受験勉強を続けてたから、何かの拍子に“推薦で通ったやつに俺の気持ちは分からないだろ”って言われたらしくて」

一気に場が熱を帯びる。

「うわー、それひどいね！！」

「でも受験生あるあるだよな」

「そうなの？」

「確かに！友だち同士でもそういうのあるって聞いたことある！！」

「お姉ちゃんの友だちはそれで親友と絶交したらしい」

「ええ！受験ってヤバイね……」

「前途多難だよ」

「まあ、進路って普通バラバラだもんね！私は美術系の専門行かって決めてる！ブン
は？」

「私はとりあえず国公立狙いかな」

「ああ、それっぽいわ！あーやは？」

「え、私は……」

そこで私はハッとしたのだ。今まで深く考えていなかったけど、この関係に終わりが来るかもしれないことを、そしてその終わりが案外早くやってくるかもしれないことを初めて悟った。

「でも私たちだってさー、年が明けたら進路希望出して、3年生になったらいよいよ受験戦争じゃん！！来年の今頃は冬休みとか言ってもらえないかもね」

「私は今まで通り、コツコツやっていくつもりだけど」

「うわあ、これだから頭いい奴は腹立つなあ！！あ、そうだ通知表見せなよ！教室の壁に貼って全員に公開してやる！——ってあーや聞いている？」

気づいたら2人が心配そうに私の方を見ていた。

「あ……ごめん、ぼんやりしてた」

「もー！あーやは仕方ないなあ」

「あ、チーム交代だよ」

2人は立ち上がり、バレーコートの方に歩いていく。遠ざかって行く背中を見つめながら、その背中にそのうち手が届かなくなりそうで、恐怖を感じた。

試合中もなんだかモヤモヤしていた私は、相手チームの渾身のアタックを見事に顔面で受け、ある意味ヒーローのような扱いをされた。ヒリヒリ痛む顔を抑えながら、楽しい時は永遠には続かないのだという当たり前だろフリーズが頭の中をぐるぐる回っていた。

着替えを終えると、私たちは絵都子先生に言われた通り教室に向かった。

「さっむー！！放課後の教室って特に冷える気がする！」

「人の気配がしないから、そう感じるのかもね」

2人のすぐ後ろを歩きながらも、その会話は霧の向こうで行われているようにボヤボヤしていた。2人が将来進む道をすでに決めていることも、自分の気持ちをさらに重いも

のにしていた。今まで全く進路に関する話をしなかった訳ではないけれど、自分がいかに何も考えずに毎日過ごしていたか、すぐ隣に居たはずの2人から不意に突きつけられた気がした。

どのくらいの間、感情の波に溺れていたのだろう。

「あーやどうした？なんか変じゃない？まだ顔が痛い？」

気付くとカリンが私の顔を覗き込んでいた。同じく心配そうにこちらを見ているブンちゃんもいる。2人の顔を見るとホッとすると同時に悲しくなる。

気づけば口から勝手に言葉がこぼれていた。

「……2人は私と離れても寂しくないよね。しっかりしてるし、どんなところでもやっていけるもんね……」

そう言葉にすると右目から涙が一粒落ちた。

「え、あーや！？ほっ、本当にどうした？寒いか？寒いからか？」

「顔が痛いの？やっぱり保健室行っておく？」

オロオロする2人の優しさが沁みて、益々涙は溢れてくる。

「何騒いでるのー？」

振り返ると不思議そうな顔をした絵都子先生が立っていた。

「あれ、向井さんどうしたの？もしかして—2人にいじめられた？」

「えっちゃん、それはないって……！」

と言いながら不安そうなカリンは、私の方を見て何か言うのを待っている。

「……寒いし、痛いし、悲しいんです……」

とりあえず絞り出した言葉は自分でもよく分からなかったが、何かを察した先生はポンと背中を叩くと「よし、こんな時は女子会だ」と言ってニコッと笑った。

絵都子先生は「他の生徒には内緒よ」と言うと、職員用の自動販売機でホットのミルクティーを3つ買って私たちにくれた。

自販機横のベンチに腰を下ろし両手で缶を受け取ると、じわじわと身体の芯まで温度が伝わっていく。一口飲むと、先ほどまでの不安が少しだけ消えた気がした。

「落ち着いた？」

私は頷く。何があったの？と優しく聞かれて、私は漠然とした不安を自分自身に説明するように確認しながら話し始めた。

「なるほど。今がとっても楽しいってことか」

絵都子先生は自分だけブラックコーヒーを飲みながら呟くように言った。

「まあ、永遠に続く友情なんてないのかもね」

その言葉に私たちは一斉に絵都子先生を見つめる。その様子を見た先生はプツと吹き出す。

「ごめんごめん、そんな傷ついた顔しないで」

「だってえ、えっちゃんがさあ〜！」

「違うの、私が本当に言いたいのはそこじゃなくて。さらに素敵な出会いがたくさん待ってるから、これからの人生にも期待を持って欲しいだけなんだ」

泣きそうな声で非難された絵都子先生は、困りながらもなんだか楽しそうに見えた。

「杉山先生は、素敵な出会いがたくさんありましたか？」

ブンちゃんの質問に絵都子先生は大きく頷く。

「もちろん！高校卒業してから今までだけでも数えきれない人と出会ったよ。その都度気が合う仲間が出来たりしてとても楽しかった。でもやっぱり中には頻繁には連絡を取らなくなってしまう子もいたりして。私も寂しかったけど、でもそれでいいのかもしれないと思うようにもなったかな」

「なんで？」

「どうしても絆を切りたくない子とは自然にまた出会えるようになってるのよ」

「そうなの？」

「私この間結婚式に呼ばれたの。誰のだと思う？高校時代の友人の結婚式だった。卒業式以来ほとんど連絡取ってなかったのに招待状が来て。旦那の転勤で偶然近くに引っ越して来たんだって。なんだか泣けたわ。部活の長距離走でいつも半泣きだったあの子が、今まで見た中で一番幸せそうな顔して笑っているのが見れたんだもの」

先生はそこで再びコーヒーを飲んだ。香ばしい香りが辺りに広がる。

「会わない時期はあったけど、それからはちよくちよく連絡したりして、たまに飲みに行って懐かしい話をするの」

「なんか大人の友情って感じ！」

とカリンが言うと

「そうでしょ。久しぶりに会っても、昔みたいに笑いあえたらまた親友なの。会えなかった時間はチャラになるの」

絵都子先生は笑った。

「あなたたちはキラキラしてる。これから自分で切り開いた未来の色に染まるから、まだ

真っ白だものね。私から見ると比喻じゃなくて、本当に眩しく見えるのよ」

先生は目を細めて私たちを見た。まるで本当に光っているものを目にしているかのよう。私たちは黙って先生の話に耳を傾け続けた。

「新しい世界に飛び込むのは怖いと思うわ。向井さんだけじゃないはず。怖いのは、今のあなたたちに無限の可能性が広がっているからなの。これからの人生、友情が壊れる事だって何度もあるかもしれない……でもそこからしか学べないこともあるだろうし。だから自分で決めた、一番良いと思う選択肢に向かって欲しいな」

一通り話が終わるとカリンが「……えっちゃん、なんか先生っぽい」と言ったので、絵都子先生は胸を張って「先生だからね」と答えた。

私たちは声を出して笑った。

2年3組の教室に戻ると、教室内にあった机と椅子が全て廊下に出されガランとしている。いつも賑やかな教室には、嘘みたいに静かな空気が漂っていた。

「さあ、さっさと終わらせましょうか」

と、絵都子先生は手にもったバケツとモップを床に置きながら言った。

「結局何をやるんですか？」

ブンちゃんが言うと

「学期末だからね。私たちを支えてくれた教室を労いましょう」

絵都子先生は、また先生みたいな顔をして微笑んだ。

教室を軽く履いた後、薄めた中性洗剤とブラシを使って床の汚れを磨き、固く絞ったモップで拭き取る。モップを持つと闘争心に火がついて、誰が一番早く教室の端から端までかけられるか競争になるのだが、絵都子先生がいたので瞬時に止められた。

青いバケツに白濁したワックス液が注がれる。新しいモップにたっぷりワックス液をつけて、教室の端からゆっくりと塗っていく。塗った場所を踏むことがないように、計算しながら広げていかなければならない。最後のひと塗りが一番上手に出来そうと言う全員一致の推薦で、ブンちゃんが担当した。

全て塗り終わりブンちゃんが教室のドアから出ると、皆そろって息を吐き出した。廊下から教室を見ると床に満遍なく液が行き渡っているのが分かる。

「毎回こんなことやってたんだ！」

「知らなかったね」

「いつもは先生だけでやっちゃうからね。でも毎年恒例なのよ。去年の2年生も一昨年

の2年生もやってくれたからこそ、今年の教室が綺麗に保たれているんだからね」

絵都子先生は塗り残した箇所がないか鋭い目つきで床を見ていたが、次第に力を抜いたので上出来なようだ。

「知らない所にも歴史があるものだなあ！」とカリンが最ものような口を利いて、「口から出まかせばっかり」とブンちゃんが呆れたように言った。

ワックスを乾燥させる為の一時休憩だと言って、絵都子先生は職員室の作業に戻った。手持ち無沙汰になった私たちは、遊びに出るのも億劫で、廊下に出した机の上に座りながら山手線ゲームをした。そのうち飽きて、窓の外を走る野球部を見ていると不意にカリンが口を開いた。

「私はさ、結構人の気持ちを考えずに発言しちゃうから、陰口を叩かれることも多いんだよね。だから1人でいる方が楽だし、浅く皆と付き合えればそれでいいかなーと思ってたりもしたんだけど、2年になってあーやと仲良くなって、心を許せる人たちがいるってのは気持ちが楽だなって思ったんだよ」

私はびっくりしてカリンの顔を見つめた。カリンの視線は野球部を追ったままである。「—私は優秀だねとか、しっかりしてるねとか言われがちだけど、人付き合いは苦手。幼馴染の彩香の存在に助けられて来た気がする。どんな時も自分の側にいてくれるっていうのが分かるから、いつでも安心して自分らしくいられるって言うのはあると思う」

ブンちゃんはしっかりと私の目を見て言った。

「あと、カリンと出会わせてくれたのも彩香だったね」

その言葉に勢いよくカリンが振り向く。

「そうだった！ブンと私の最初の頃の会話って“今日はあーやがあれ忘れてたね”とか“あれやらかしてたね”とか報告会だったもんねえ！」

2人は目を見合わせて笑った。そして少し悲しそうな顔になって続けた。

「私たちも進路の違いでケンカとかしちゃうのかな？」

「バラバラになるのは寂しいけれど、どこかで繋がっていられたらいいよね」

「えっちゃんが言ってたみたいに、たまに会った時に仲良くできれば最高だよ！とは言えまだ3学期は残ってるし！！」

「なんなら3年生も同じクラスになるかもしれないし」

「そうそう！残りの学生生活、楽しもーよ！！ね、あーや！」

笑顔の2人に挟まれて、私の心はとても暖かかった。

そのうち先生が戻ってきて、床が乾いたので再びワックスを塗った。

2度目のワックスがけは1度目より手際よく出来た。いつの間にか心のモヤモヤが無くなっていることに気づく。床と一緒に心まで磨かれたように清々しい気持ちで、私は教室を見渡した。

翌日、2学期の最終日は朝から全校集会があったので体育館に向かった。

ふと前を見ると、琴ちゃんが篠宮さんと連れ立って体育館に入って行く所だった。

「琴ちゃん、仲直りしたんだね!？」

思わず、でも小声でブンちゃんに話しかけると

「本当だ、良かった!」

ブンちゃんは嬉しそうに笑った。

校長先生の話は「有意義な冬休みを」という言葉で締めくくられていた。

ホームルームでは通知表を配られ、クラスは一喜一憂に包まれた。ブンちゃんの通知表が壁に貼り出されることは無かったが、中身を見せてもらったらしいカリンは悔しそうな顔をしていた。

机と椅子と生徒が収まった教室は、昨日のガランとした姿から見違えるように賑やかで、息を吹き返したようだった。床はツヤツヤと光り、何となく誇らしい気分になる。

私は所々傷のついた机に触れながら、未来に思いを馳せる。来年は、どんな子たちがこの教室で1年を過ごすのだろうか。そして私たちは来年、どんな教室で1年を過ごすのだろうか。2年後、5年後、10年後は……? 考えると不安になるけど、素敵な出会いがあることを心から期待しようと思う。